

京極読書新聞 <第17号>

発行日 平成22年10月 1日(金)
京極町生涯学習センター湧学館

『平家物語』を読む会に参加して くろたき ちおり 黒滝千織(京都市在住)

『平家物語』と聞くと、中学国語の時間に暗記させられた「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり…」と自然に口が動く。今ではなぜ暗記させられたのかも忘れてしまったが、私の生徒(家庭教師先の高校生)や近所に住むおじいさんまで世代を問わず誰もがあの一節を口ずさむことを去年知った。その時は、「これが日本の教育なのか」と思わず顔してしまう様な快感があったのを覚えている。去年、恩師村山功一先生より、「平家物語読書会」に出してみないか、とお誘いを受けた時に実感した『平家物語』という軍記物の存在感が確かにそこにはあった。

このように、私は一節を暗唱することが出来るが、実はそれまでである。小中学生に歴史を教えているので、ある程度の知識はある。しかしながらこれは歴史的知識であって、物語を語れるわけではない。何よりも実は古典が大の付くほど嫌いであった。中学生の頃、国語の時間は好きだったが、ある時期から嫌いになり、今では縁遠いものとなっている。恩師村山功一先生とは高校で出会ったのだが、この時すでに国語と聞くと虫唾が走る様になっている私が出た。古典の勉強を一切怠ってきた私を未だにこうして可愛がってくれていることにひれ伏すばかりである。そんな私がまさか自分の嫌いな古典、『平家物語』について京都でフィールドワークをすとは思ってもいなかった。このような機会を与えてくれた村山先生をはじめ、京極町湧学館の方々にはここで感謝の意を表したいと思う。

しかしながらタイミングがこの上なく悪い。前々から私生活においてもタイミングが悪いなあと思ってはいたが、まさか京極町まで来てタイミングを外すとは思ってもいなかった。昨年は濾過性病原体インフルエンザの魔の手に阻まれ、おかげさまで寒い北海道で凍えながら1週間を過ごさせていただいた(これは言い過ぎである)。一度あることは二度あるなんて考えもしなかったが二年目の今年、意気込んで動画まで持って京都からいざ出陣、まさに私の住む地西陣から東の陣(北海道だから北の陣か?)への出立である。まるで義経よろしく平泉に出立せんとば

かりに意気込んだ。これが良くなかったのか、まさかのパソコンの不調という出来事に遭遇した。いくら可愛がっても機械は機械である。声をかけても、声援を送ってもパソコンは「ウィーン…ブチッ」とあくまでマシ的な音を立てて真っ暗になった。私の頭も真っ黒である。こうして2度目の発表もタイミングを見事にはずし、作った資料を見れぬまま、私だけが凱旋してしまった形となった。後ろを見ると仲間がいない、義経最良の私には気持ちが分かるようである。

少々落ち込みはしたものの、温かい目で見守ってくださった「平家物語を読む会」の皆さんをはじめ湧学館の職員の皆様、そして村山先生には大変感謝をしており、低頭するばかり。特に、会の方の「徳子さんのバチが当たったのかも…」の一言は身にしみ、最後を笑いで締めくくることが出来た。二度あることは三度あるのか、はたまた三度目の正直なのか、どうなることか分からないが、また機会がありました時は、京都より『平家物語』の主役たちをお供に引きつれ、参上したいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

京都西陣の地より…名水の京極へ



京極読書新聞は
毎月1日発行です。

京極から文学散歩

第5回 カムパネルラ・保阪嘉内

湧学館司書 新谷 保人 (あらや・やすひと)

石川啄木の北海道漂泊のきっかけともなった明治40年8月の台風。京極とも深い縁を持つこの台風からは、もうひとつ別の物語も生まれています。それが、カムパネルラ。

「カムパネルラ、またぼくたちふたりきりになったねえ、どこまでもどこまでもいっしょに行こう。ぼくはもうあのさそりのようにほんとうにみんなのしあわせのためならばぼくのからだなんか百ぺん灼(や)いてもかまわない。」

「うん。ぼくだってそうだ。」

カムパネルラの目にはきれいな涙がうかんでいました。

「けれどもほんとうのさいわいは一体なんだろう。」

(宮沢賢治「銀河鉄道の夜」)

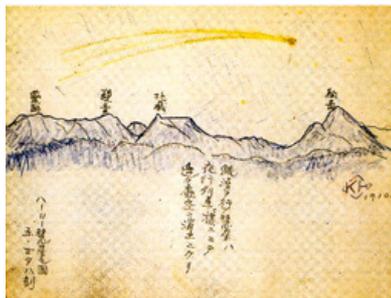
銀河鉄道の夜を旅する、ジョバンニとカムパネルラ。このカムパネルラのモデルとされる保阪嘉内(ほさか・かない)は、明治29年10月、山梨県の北巨摩(きたこま)郡駒井(こまい)村に生まれました。保阪家は代々この地に続く地主の名家です。少年期の保阪嘉内は、毎年のように襲ってくるこの台風豪雨による川の氾濫・洪水被害を目のあたりにして育ちました。農民たちがついこの土地をあきらめ、もう北海道でやり直すしかないと思いつめた北巨摩の厳しい現実。嘉内の心の中にも、なんとかして、この農民たちの窮状を改善してゆかなければならないという思いがつのりました。

嘉内がめざしたのは岩手県の盛岡高等農林学校。農業を深く勉強して、台風や冷害にも負けない理想の村をつくるのだと彼は意気込みます。そんな彼を待っていたのが不思議な運命の巡り合わせ。嘉内は、盛岡高等農林の学生寮で宮沢賢治と同室で暮らすことになったのです。

ふたりが意気投合したのは言うまでもありません。まるで、ジョバンニとカムパネルラそのもののように、ふたりは自分の夢を語り、「ほんとうのみんなのしあわせ」を語り合います。嘉内が宮沢賢治にあたえた影響については、嘉内のこの作品が世に出てくるにつれて、想像以上に大きなものであったことがしだいに明らかになってきています。

例えば「銀河鉄道」というアイデア。今までは賢治のオリジナルであるとされてきましたが、これも、嘉内が描いた「明治43年のハレー彗星」のスケッチが出てくることによって皆が驚くことになりました。スケッチには「銀漢ヲ行ク彗星ハ夜行列車ノ様ニテ遙カ虚空ニ消エニケリ」とはっきりと書いてあったのです。賢治は高等農林の学生寮で嘉内から「銀河鉄道」の話聞いたのでした。

賢治の人生に大きな影響を与えた保阪嘉内。その嘉内の人生のスタートにも、明治40年の台風がからんでいることに少し感動をおぼえます。若い時の友だちは大きい。



▲保阪嘉内の「ハレー彗星」スケッチ

▼盛岡高等農林の文芸サークル「アザリア会」。後列、左が保阪嘉内。右が宮沢賢治。



発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

